

批評と紹介

欧米現存の満洲語文献

神田 信夫

一

私は一九六三年の五月から翌年の三月にかけて、アメリカからヨーロッパ諸国を巡り、主として彼の地の大学や図書館に蔵せられてゐる満洲語文献を調査してきた。その詳細は他日に譲ることにして、ここでは一応の概略を述べてみたいと思ふ。

周知のやうに清朝時代にシナに渡来した宣教師などの西洋人は、当時清朝の国語であつた満洲語に多大の興味を抱き、それに通曉する者も珍しくなかつた。さうした伝統のあるためか、近年に至るまで西洋人には満洲本に対する関心が強く、ヨーロッパやアメリカには意外に多くの満洲本が現存するのである。その一斑については、夙くから諸学者によつて紹介されたり、書目に著録されたりしてゐるが、もとより全貌は明かでない。戦後になつて、我が国の満洲語学者で彼の

地に赴いた山本謙吾氏はアメリカにある満洲語文献の一端を紹介されたし、池上二良氏はヨーロッパで丹念に調査してその成果の一部を発表されてゐる。私はこれら諸氏の業績に少なからぬ恩恵を受けたことについて感謝の念に禁へないが、ただ私なりに調べて気付いたところをいささか記すこととする。

二

先づ最初にアメリカについて述べよう。アメリカにおける満洲本の蒐集については、先年銭存訓氏とナン(G. R. Nunn)氏が共同で発表された「アメリカの図書館における東アジア文献」といふ論文の中で、主要な図書館に蔵せられてゐる満洲本の冊数が紹介されてゐる。私はこれを一つの頼りとして各地の図書館を訪ねたのであつた。

アメリカで最も多く満洲本を所蔵してゐるのは、やはりワシントンの国会図書館(Library of Congress)であらう。ただこの満洲本については、書名カードが一応出来てはゐても、極めて不完全である上、私自身の滞在日数の関係で全部を網羅的に調べられなかつたので、正確なところはよくわからないが、点数にして二百位あるかと思ふ。順治刊本の「清文明洪武要訓 hung u i oyonggo tachiyän」を始め、「八旗通志初集」 jakun gusai tung jy suchungga weilehe

bihe] や乾隆の「欽定大清会典」hesei toktobuha daicing gurun i uheri kooi bihe]・「欽定大清会典則例」hesei toktobuha daicing gurun i uheri kooi i kooi hacin bihe] など比較的珍しい大部な殿版の外に、内府抄本と思はれる精抄本が幾つか目についた。例へば「御製增訂清文鑑 han i araha nongime toktobuha manju gisun i buleku bihe] や「礼部則例」dorolon i jurgan i kooi hacin i bihe]・「欽定吏部銓選漢官則例」hesei toktobuha hafan i jurgan i nikan hafasa be sindara kooi]・「太常寺則例」weecen i batia be alha yamun i kooi hacin i bihe] の端本である。そのうち太常寺則例は李德啓氏の「国立北平図書館故宮博物院図書館滿文書籍聯合目錄」(以下「聯合目錄」と略称する)にも刊本抄本ともに著録されてゐないものである。また内府抄本として「欽定大清会典事例」hesei toktobuha daicing gurun i uheri kooi i batia hacin bihe] が二帙十二冊と別に一冊ある。帙入りの方は第一三五套、巻一一五六〜六九の十四巻で、歩軍統領に部に当り、別の一冊は巻五六六、兵部の部である。どちらも光緒年間に編纂されたものの一部である。因みに大清会典の滿文本で刊本のあるのは、康熙・雍正・乾隆の各年間に編纂された三種だけで、嘉慶の会典と会典事例は、抄本のあることが聯合目錄^{頁一五}に見えてゐるが、光緒のは同日録にも著録されてゐな

い。後述のやうに光緒の会典事例の一部はヨーロッパにも残存してゐるけれども、とにかく珍しいものといへよう。

その他、私が国会図書館で見たところで、これまで余り知られてゐない滿洲本としては、「清語採旧」といふ滿漢合璧の二冊本がある。全て五十一葉といふ小冊で、封面に「長白山卓佳氏兆成著／清語採旧／滿漢話条」と三行漢字だけで記されてゐる外、刊記も序跋もない。内容は教訓の如きものである。抄本としては、滿文と漢文と別々に一冊づつから成る「Buyenin be selabure nyun maktacun i sutucin」「怡情九贊」といふものがある。九つの事物に対する漢文の贊を集め滿文に訳した精抄本で、彩色の絵も挿入されてゐる。文雅を娛しむ旗人の日常の一端を伺ふに足るものであらう。

三

アメリカにおいて国会図書館につぐ大きな滿洲本のコレクションは、ハーヴァード・エンチン研究所(Harvard-Yenching Institute)であらう。この滿洲本は既にきれいに分類整理されてゐて、重複本をいれて百七十点程ある。前に山本氏が紹介された二十八種は、ほんの一部に過ぎない。ただ点数は相当多いが、清文彙書・清文補彙・清語摘抄などありふれた書物の重複が少くなく、その他も大体は普通に見

られるものである。しかし「清文補彙 manju gisun be niyecme isabuha bihe」の中でも、一本は収録語数の少い初刻本で、しかも巻八の最末行に「此書在琉璃廠西門内、問離漢齋刻字舖便知」と二行に分けて刻されてゐるので、刊刻所もわかる。この文字のある清文補彙は天理図書館にもあるけれども比較的少ないものであらう。また割合新しい刊本で、フックス (W. Fuchs) 氏も紹介されてゐるが、道光十三年仲秋刊の滿漢合璧の「軍令四十則 coohai fafun dehi meyen i bihe」や同十二年八月刊の「滿漢合璧行軍紀律 manju nikan hergen i kancime araha cooha yabure fafun bihe」・「各循分以勉善四十頭 teisu teisu sain be kicebure dehi ujui bihe」も伝本の余り多くなつたものとへよう。

その他、刊本で珍しいと思つたものに時憲書がある。満文の時憲書については、先年池上氏がヨーロッパで丹念に調べられたのであるが、ハーヴァードには雍正三年と同四年の七政時憲書がある。七政時憲書とは、普通の時憲書と同じく、欽天監で作成し頒行されたものである。雍正三年のは、本文の首行に「大清雍正三年歲次乙巳七政経緯宿度五星伏見目錄」daicing gurun i huwalyasan tob i ilaci aniya, nihon mehe, nadan dasan i hetu undu siyeo ushai du, sunja ushai somire sabure ton」とあり、同四年のも年次干支が異なるだけである。因みに池上氏はパリの国民図

書館の時憲書を、時間の関係で見られなかつた由であるが、ここにも康熙十九年と乾隆三十四年の七政時憲書が存する。康熙十九年には、その表紙に、印刷された原題簽が貼付されてゐて、「大清康熙十九年七政経緯宿度時憲書」daicing gurun i elhe taiin i juwan uyuci aniya nadan dasan i hetu undu yabure du i forgon i yargiyar ton」とある。⁽⁵⁾ なほパリには乾隆三十四年及び道光三年、同二十五年の普通の時憲書も存在することを序でに附記しておきたい。

ハーヴァード・エンチン研究所にある満文抄本としては、三十六項の徳目について述べた滿漢合璧の「三十六調 gisun ninggun meyen i oyonggo i bihe」など他にないものもある。しかし前に山本氏が列挙されてゐる幾点かの檔冊の内、「第四甲喇檔冊」と題されてゐる道光二十八年の全満文のものや、乾隆三十九年金川討伐の際に参贊大臣富徳が咨送した「富徳奏摺檔」と題されてゐる滿漢文とりまぜた檔冊などが特に面白いやうに思はれた。なほ漢文本ではあるが、抄本の「八旗叢書」は旗人の著作を集めた叢書としてユニークな存在であることを注意しておきたい。

四

ハーヴァード・エンチン研究所に関連して特に重要なのは、同大学教授クリーヴス (F. Cleaves) 氏個人の滿洲本の

コレクションである。私は同氏の好意により、氏の研究室に置かれてゐる満洲本を自由に調査することが出来、まことに幸であつた。これは一九三八年から四〇年にかけて北京で集められたものださうで、私の目にしたところでは、点数にして百二十程あつた。このコレクションの特徴は、研究所の一般書が多いのに対して、珍本特に抄本や檔冊の類が豊富なことである。そしていづれも極めて保存のよいきれいな本で、氏の書物に対する愛好の念の篤いこともよく窺はれた。

さて刊本としては、乾隆の「大清會典」及び「同則例」の完本など殿版の大部なものも幾部があるが、とりわけ珍しいのは「新刻清書全集 ice foloto manju i seren bithe」である。クリーヴス氏の蔵本中に本書のあることは、既に一九四二年にフックス氏が紹介されてをり、当時フックス氏も別に一部所蔵されてゐて、その内容を詳しく述べてをられるから、いま更めて説くまでもなからう。ただクリーヴス氏の蔵本は全五冊揃ひ、各冊とも封面を始め印刷された原題竝までついてゐる完全なものであることを指摘しておきたい。実は全五冊の内、第五冊の「清書対音協字 manju i acanara bithe」はゾッチカン図書館やわが東洋文庫にあり、第二冊の「新刻滿漢備考 ice foloto manju nikan sonjome yongki-yaha」は、ハリの国民図書館にあり、第三冊の「新刻滿漢同声 ice foloto manju nikan adali jilgan」はライデンの

漢学研究院に残存してゐるけれども、いづれもクリーヴス氏蔵本のやうに封面までついた美本ではない。その他、クラプロート (J. Klapproth) の手に成るペテルスブルグのアカデミーの滿漢図書目録にも「清書全集」の名が見えてゐるから、現在なほレニングラードに残存してゐるかも知れないが、(補注1) これまた四冊であつて完全ではなささうである。

クリーヴス氏のコレクション中の刊本で、もう一点ぜひ紹介しておかねばならないものに「御製百家姓 ioi iy be giya sing」がある。李氏の聯合目錄頁二によると、五巻五冊から成る道光元年の抄本の同音合璧なるものの第三冊に御製百家姓の名を挙げてゐるが、何の説明もないことであるから、これが果してクリーヴス氏所蔵の刊本と同一のもの抄本であるかどうか不明である。またワイリー (A. Wylie) の目錄(註) に見える Pe Giya Sing, The Hundred Family Names といふものも委しい説明がないからその内容がよくわからず、或ひは後に述べる別の百家姓を指してゐるのかも知れない。クリーヴス氏所蔵の御製百家姓は、序二葉、本文二十葉全て二十二葉の小冊子である。序は全文漢文だけで、その後「康熙三十二年歲次癸酉夏四月一日、婁東沈啓亮 弘照謹書／燕都程式子範敬鐫」と見えてゐる。本文は毎半葉六行で、上半部には御製百家姓の漢字を四字づつ先づ記し、次行にその漢字音を滿洲字で示してゐるので、滿漢三行づつ

となる。そして下半部には分注をやはり滿漢兩文で記してゐる。そして本文の末尾に「婁東沈啓亮敬書 *leo dung, xen ki liyang singuleme araha:*」と滿漢兩文で書かれてゐる。要するにかの大清全書の編者として名高い沈啓亮の著作である。この序文の内容も彼の伝を考へるのに有用であるが、それについては別稿に譲りたい。

一体、御製百家姓とは康熙帝によつて作られた漢文の百家姓であるが、さほど古いものでもないのに幼童の村書であるためか伝本が少く、辭源や辭海の百家姓の項には、現在伝はつてゐないと記してゐる位である。しかしわが内閣文庫には二部も現存してゐる。即ち一部は康熙二十一年の刊本であり、他の一部は乾隆四十三年の刊本である。両者は全くの異版で、乾隆刊本には注がないが、康熙刊本には注がある。ところがその注は沈啓亮の作つた滿漢本のそれと合はない。しかし滿漢本の注は沈啓亮自らが作つたと考へるよりも、彼が用ひたテキストが内閣文庫のものとは違つてゐたと見るのがよいかと思ふ。ともあれ滿文の御製百家姓は、やはり沈啓亮の著作である滿漢千字文と共に、当時の漢字音の滿洲字による写し方などを調べる上に、極めてよい資料といふべきであらう。

クリーヴス氏のコレクション中の抄本としては、滿漢合璧の「閒中佳趣 *jabduna nouri antanga baita*」が珍しい

かと思ふ。かの聊齋志異を滿訳した札克丹 *jakdan* が古今の詩や聯を訳したもので、八冊から成る。そして第八冊は附録として「清語摘趣録 *manju gisun i yobo naklara sarkivan*」となつてをり、滿文だけで漢文はない。また「御批歷代通鑑輯覽」*han i pilehe tonggime araha jalan jalan i hafu buleku bithe*」の内府精抄本が十五冊ある。大部分は宋金時代の部であるが、聯合目錄頁三七によると故宮藏本はかなりひどい欠本であるから、クリーヴス氏のもその一部であるかと思ふ。

なお同氏のコレクションには、滿文の檔冊が沢山ある。例へば「嘉慶年鎮守黑竜江等処雲騎尉奏摺」と帙の題簽に書かれてゐるが、實際は黑竜江將軍と副都統らが河南巡撫に送つた咨文を集めた滿漢兩文の檔冊の如き類である。いま一々紹介する余裕がないが、特に面白く思つたのは、滿文だけの八旗の戸口檔冊である。即ち正黃旗蒙古の頭甲喇（第一參領）所屬の各佐領ごとに、各家の家族の名、地位、年令がすべて滿文で記されてゐる。同じ頭甲喇の檔冊が二部あり、兩者を比べると同一人の年令に十年の差がある。どちらも年代は不明であるが、清末光緒年間のものかと思ふ。その他、鑲黃旗蒙古頭甲喇所屬の參領について同様な檔冊があるが、これには末尾に光緒二十年の年次が滿文で記されてゐる。

五

シカゴのニューベリー図書館 (Newberry Library) にラウファー (B. Lauffer) のコレクションがあり、その中に満洲本が含まれてゐることは、古く一九一三年に、彼自身の作つた簡単な紹介の小冊子 *Descriptive Account of the Collection of Chinese, Tibetan, Mongol and Japanese Books in the Newberry Library, Chicago 1913* が出版されてゐるのでよく知られてゐる。このコレクションは、彼が一九〇八年から一〇年にかけて、シカゴのフィールド博物館の調査団の団長として極東を旅行した際に購入したもので、満洲本の外に漢籍を始め蒙古文、チベット文、日本文の書物もある。その全部についてラウファーは自ら目録を作つたのであるが、未定稿のままではなほ出版されてゐない。ニューベリー図書館のラウファー・コレクションは、その後一九四三年シカゴ大学に買取られ、現在その極東図書館 (Far Eastern Library, University of Chicago) に保管されてゐる。私がここで見た満洲本は、ラウファー・コレクションのもの約五十点で、それ以外に約十一点あつた。

さてラウファーは前掲の紹介文の中で、満洲本として殿版の日講易経解義・日講書経解義・日講四書解義などを非常に得意に挙げ、日講四書解義の写真まで挿入してゐるのである

欧米現存の満洲語文献 神田

が、これらはそれほど珍重すべきものではない。むしろ私は坊刻本の「新刻滿漢字書経 ice foloto manju nikan hergen i su eingu」六卷四冊が珍しいと思ふ。見返には右の書名の外に「乾隆三年春鑄 京都鴻遠堂梓」とあり、巻首の序の末尾にも「乾隆三年三月穀旦書」と記し、「鴻遠堂藏書」の印を捺してゐる。右開きで、満文を上段、漢文を下段にいれる体裁は、姉妹本と思はれる新刻滿漢字四書や新刻滿漢字詩経と同じである。四書や詩経はこれまで書目にも載せられ、現に各地に存在するが、書経はどの目録にも見えず、シカゴ以外でも見当らなかつた。その他、ラウファー・コレクションの刊本では、既にフックス氏も注意されてをり、東洋文庫にも一部あるものであるが、⁽¹⁴⁾ 滿漢語字典である「滿漢同文全書 manju nikan su adahi yooni bibe」八卷八冊がやはり珍しいといへよう。抄本では「百二老人語録」*emu tangun orin sakda i gisun sarkivan* が重要である。夙にラウファー自身の記述にみえ、その後ルドルフ (R. C. Rudolph) 氏が紹介されてゐるので周知のところである。本書は元來刊本がなく、何部か抄本が伝存してゐて、大阪外国語大学にも一部あるが、シカゴ本には外語本に欠けてゐる巻首の序文がついてゐる。

なほシカゴにはラウファーの勤務してゐたフィールド博物館 (Field Museum, 現在は Chicago Natural History

Museum)があるが、彼が一九一四年にフランクケ(O. Franke)と共編で刊行した *Epigraphische Denkmäler aus China, Ester Teil* に収録した満文の拓本の原物が、今もなほそのままここに保存されてゐる。その他、満洲本も二三点ある。

次にホルティモアのシモンズ・ホプキンス大学 (Johns Hopkins University) に、かの満独辞典の編者であり皇清開国方略を独訳したハウエル(E. Hauer)の満洲本のコレクションが存在することは、前に山本氏が紹介されてゐるところである。このコレクションは一九三九年に購入され、もと同大学の The Walter Hine Page School にあつたのであるが、その閉鎖により現在には中央図書館の歴史部に保管されてゐる。山本氏のリストに載つてゐないものに、殿版の「大清仁宗睿皇帝聖訓」巻七一の一冊と光緒二十八年の時憲書があるが、俱に登録番号のないものである。またハウエル・コレクションの漢籍の部に、滿漢蒙三体の石印本の千字文があつた。ともあれ山本氏のリストをみてもわかるやうに、このコレクションの満洲本は約五十点あるけれども、大体はありふれた通行本である。その中で、「滿漢合璧臣語集粹 manju nikan hergen kamcibuha hoi ioi iy ts'ui bithe」を最も珍しく思つた。四卷四冊より成る非常な精刻の美本である。フックス氏の書目にはむろん見えてゐるが、私はハウエル・コレクション以外に実際に手にしたことがない。

六

ニューヨークのコロンビア大学の東アジア図書館 (East Asian Library, Columbia University) には満洲本が約七十点あり、既によく分類整理されてゐる。この満洲本も大体は普通行はれてゐるものであるが、とりわけ珍しいと思はれるのは「滿漢合璧集要 manju nikan hergen i kamcicha isabuha oyonggo bithe」「滿漢合璧幼学須知 manju nikan hergen i kamcicha tuktan tacire ursei urunaku ulhire bithe」「滿漢合璧選要 manju nikan hergen i kamcicha sonjo ho oyonggo bithe」「訓旨 tacibure hesei bithe」の四冊である。この四冊をまとめて一函に収めてゐるが、函は新しく作られたもので、元来これがセットであつたか疑問である。しかし四冊とも京口官学の刊本で、同じ体裁であるが、刊行年は幼学須知だけが乾隆三十一年四月で、他の三冊は同二十九年八月となつてゐる。この四冊の内、滿漢合璧選要は、既にフックス氏が同版のものを紹介してゐる。また幼学須知は、道光元年二西堂刊本がクリーヴス氏の蔵書中にある。メルレンドルフの目録にも一八二二年即ち道光二年刊のものを挙げてをり、聯合目錄⁽¹⁷⁾三頁にも抄本が著録されてゐるが、内容が同一であるか疑問である。そして京口官学刊本はコロンビア以外にどこにあるか知らない。次に訓旨につい

ては、パリの国民図書館に「滿漢合璧訓言 manju nikan hergen i kamchia tachure hešen bithe」といふ刊本一冊があり、それと同版と思はれるものをフックス氏も一本所有されてゐたのであるが、京口官学刊本とは異版である。京口官学刊本は、ヨーロッパ以外ではこれまで見当らなかつた。ところで滿漢合璧集要は、同版異版ともにこれまで著録されてゐないやうである。内容は tanggū heyen のやうに百編の文を挙げ、滿洲語の重要さと諸心得を説いたもので、各頁上段に滿洲語、下段にその口語漢語訳を記した滿洲語入門書といふべき書物である。

ニューヨークでは公立図書館 (New York Public Library) にも僅か十点足らずながら滿洲本がある。「滿漢同文分類全書」がやや目につく外は特にいふ程のものはない。

プリンストン大学 (Princeton University) にゲスト東洋図書館 (Gest Oriental Library) があり、漢籍の蒐集に富むことは、既刊の葛思德東方藏書庫書目でも知られるが、ここにも滿洲本が約七十点ある。その内珍しいものとして、ワシントンの国会図書館にも一部ある内府抄本の「礼部則例」百八十六巻中の百二十二巻と総目の計二十二冊が残存してゐるのや、同じく内府抄本の「欽定國史大臣列伝」[*hesei toktobuha gurun i suduri i ambasai faldangga utabun*] が二十四巻二十四冊残存してゐるのが注目される。因みにつ

リンストンには、別に道光二十六年編纂の漢文本の「國史大臣列伝」の内府抄本百四十四巻百五十冊が完全に揃つてゐるが、その内容については、滿文本のそれと共に稿を改めて紹介する予定である。なほ滿文檔冊として「大清上諭奏事檔集」と題する百十二冊から成る大部なものがある。道光から光緒年間にかけての内廷関係の事件についての上諭や上奏文を集めてゐて、滿漢両文或ひは漢文だけのものもあるが大部分は滿文だけである。その他、「日月星辰占」と仮題をつけてある四冊から成る全滿文の精抄本がある。毎頁上部に彩色の図解を示し、下部に説明文を記して、日月星辰などの自然現象の変化による予言を述べてゐる。万宝全書などにもそれに類する記載があるが、未だその原典を確めてゐない。

次にプリンストンの滿文刊本としては、「竟是齋繙訳西廂記」*ging xi jai i ubaiyambuha si siyang gi bithe*」が珍しい。西廂記の滿文本は、康熙四十九年正月吉日の日附の序のついた滿漢合璧のものが普通行はれてをり、その他、大英博物館に滿文だけの別の刊本があるが、プリンストンのはそのどちらでもない。全卷滿文だけの実にきれいな精刻本で、四卷四冊に分れ、巻首に序が三葉、法が二葉、総目が二葉ついてゐる。序には日附がなく、刊刻の年次も不明であるが、序の末尾に「陽刻で」[*sanding hakcin*] 陰刻で「*ubaiyambuha araha*」と篆文で刻した印形が印刷されてゐるから

陽刻の字は訳者の雅名であろう。各冊の表紙の題簽には「*batyambuha si siyang si bithe*」と刻されてゐるに過ぎないのに対し、目次や本文の第一行に記されてゐる標題には前掲のやうにその上で「*ging si jai i*」と冠してゐる。実はブリュクソン所蔵本には満文の右傍に全冊にわたつて漢文の書入れがあり、*ging si jai*には「竟是齋」と当ててゐるのである。それが正しいかどうか、そして何人であるのか未だ充分検討してゐないが、とにかく珍重すべき満文西廂記の一異版である。その満文訳も通行本や大英博物館本と異り、例へば第一章の題名の「驚艶」は、通行本と大英博物館本が「*hojo de noroko*」なのに対し「*fiyan de noroko*」であり、第二章の題名の「借廬」も同様で「*fatarata poo be baita*」なのに対し「*asgan be baita*」といふやうな状態である。

パークレーのカリフォルニア大学の東アジア図書館 (East Asiatic Library, University of California) にも満洲本が三四十点あり、通行本が一通り揃つてゐる。ただ未だよく整理されてゐないのと、私自身の滞在時間の関係で充分調査できなかつたが、「*ju too coohai bithe*」といふ六韜の訳と思はれる抄本が特に珍しく思へた。

七

ヨーロッパに現存する満洲語文献については、池上氏の記

述があるので、重複を避けて同氏の触れてゐられないところを述べることにした。

先づイギリスにおいて、質量ともに第一に挙げねばならないのは、やはりロンドンの大英博物館 (British Museum) であらう。この満洲本は既によく整理され、ロンドン大学名譽教授サイモン (W. Simon) 氏によつて簡単な解説をつけた目録が作られてゐるが、当分刊行の予定はないやうである。抄本では夙に名高い「五体清文鑑」はもとより、「親征平定朔漢方略」*beye dalhame wargi amargi babe nechiyeme toktobuha bodogon i bithe*」の巻首三冊の内府抄本も珍しい。その他、内府抄本には「欽定国史大臣列伝」*hesei toktobuha gurun i suduri i ambasai faidangga ulabun*」第一九套四卷四冊(巻六九)と「欽定国史忠義伝」*hesei toktobuha gurun i suduri i tondo jurangga i faidangga ulabun*」第四一巻一冊や最近東洋文庫で景印された「欽定西域同文志」がある。

刊本としては、前述の満文だけの「西廂記」*si siyang si bithe*」が珍しい。フックス氏が稀覯本のリストに挙げてゐる程のものであるが、大英博物館には一部も現存する。しかし私はここ以外では見かけなかつた。次に興味のあるものに「感応篇」*acabume karulara bithe*」が二種ある。俱に首尾の欠けた不完全な本であるが、その一つは全部満文で挿

絵が入つてゐる。首めの欠けてゐる序文らしき文の末尾に「*elhe taifn i juwan juweci aniya sahalayan singgeri tuwari omšon biyai sain inenggi giingueme foloho:*」即ち康熙十二年壬子冬十一月吉日謹刻とみえる。但し康熙十二年(一六七三)は癸丑の歳で、壬子はその前年であるから、年次か干支が誤つてゐるのであるが、クラブロートやワイリ⁽²³⁾が挙げられてゐる一六七三年の刊本と同一のものであらう。他の一つは滿漢兩文から成り、やはり挿絵が入つてゐる。帙の題簽に「滿漢感應篇圖說」と墨書してあり、四冊に分れ、丁附は癸六四から癸一五八までで、癸の部すらも不完全であるが、前にフックス氏が紹介され、現に天理図書館に完本が存する⁽²³⁾。康熙五十四年(一七一五)刊本の一部である。因みにこの感應篇は朝鮮でも滿文の部分で諺文に改めて刊行されてゐる。なほバリの国民図書館には「(太上感應篇) *tai sang h acabume karulara bithe*」と印刷された題簽のついてゐる六卷四冊の完本がある。これも康熙年間の刊本であることは疑ないが、全部滿文で挿絵がなく、大英博物館本のいづれとも異なる別本である。その他、夙にクラブロートは乾隆二十四年(一七五九)刊本を紹介してをり、聯合目録⁽²⁴⁾頁一には滿文だけの四卷四冊の刊本、ハンザロフ(H. Bursapov)の目録にも三冊の刊本が見えるが、委しくは別稿に譲りたいと思ふ。

雍正帝の「(上論) *dergi hese*」を一通一冊づつ刊刻した

もののあることは、既に知られてゐるところであるが、大英博物館には五点あり、全部をまとめて洋裝本一冊に製本してある。この上論の日附は雍正二年十一月十五日、同三年四月十六日、同年五月二十二日、同二年十月二十八日で、三年五月二十二日附のは二点あつて内容が異なる。これら五種の上論の内、雍正二年十一月十五日附のは聯合目録⁽²⁴⁾に見えてゐる。もつとも同じ日附でも内容が違ふかも知れないが、他の四点は全く著録されてゐないのである。なほ雍正帝の上論は、この外にフックス氏が紹介されてゐる雍正二年八月二十二日附のものがあり、コペンハーゲンの王立図書館にも一本現存する。大英博物館のもコペンハーゲンのもの、俱に朱刷りであるが、ただ後者のには表紙や本文の用紙に竜の模様があるのが前者と異つてゐる。

その他、大英博物館には仏教關係の經典なども数点藏せられてゐるが、滿漢合璧の「大般若波羅密多經成語 *amba sure i cergi dalin de akunaha nomun i šošon gisun toktoho*」が特に珍しいかと思ふ。タイトル頁に滿漢兩体でこのやうに記し、その左右に滿文だけで *abkai wolyhe i/ han i ubaiyambhangge* 即ち「乾隆帝の翻訳させたもの」とある。全て八十八葉から成り、横長の経本様式で、表裏兩面に朱色で印刷したものである。

なほ大英博物館には朝鮮本ではあるが、近年韓国で景印本

の「八歳児・小児論」や「三訳総解」及び「清語老乞大」などの満洲語学習書が揃つてゐる。これまた大いに珍重するに足るものであらう。

八

ロンドン大学の東洋アフリカ学校 (School of Oriental and African Studies) の図書館も、イギリスにおける満洲本の蒐集としては、大英博物館や次に述べるケンブリッジ大学図書館につぐ重要なところといはねばならない。点数としては約五十点であるから、さして多いわけではないが、なかなか珍しいものが含まれてゐる。刊本では先づ雍正帝の「御製朋党論 nan i araha guci hoki i leolen」が二種もあるのが注目される。一つは殿版の満文本で、これは古くメルデンドルフの書目にも見え、現に西ドイツのマールブルグの国立図書館に保存されてゐる彼のコレクションの中に残存してゐるし、フックス氏も旧奉天図書館所蔵本について説明してゐるのであるが、比較的伝本の少ないものである。ところで他の一種は全くの異本である。即ち満漢合璧で、末尾には殿版にみえない雍正二年陽月(十月)附のやはり満漢合璧の後記が三葉ついてをり、版心に漢字で「三善齋」と刻されてゐる。この満漢合璧の御製朋党論は、これまで書目などに著録されてゐないもので、他にどこにあるか知らない。それから

「翻訳詞聯詩賦 uballyambuha uulen juru gisan irgabun [ujurun]」も、フックス氏が紹介してゐるのと同版の文英堂刊本であるが、割合新しい版とはいへ、同氏が稀覯本のリストに入れてやるやうに伝本の多くない満洲本である。

ロンドン大学の満文抄本には、実に貴重なものが存在する。即ち「元史」の満文訳草稿で、戦後サイモン氏が北京で購入された由であるが、さすがに満洲本に対する造詣の深い同氏だけあつて、その眼識に敬意を表さずにはをられない。本書に、羅振玉の跋がついてゐるのをみると、元来羅氏の蔵本であつたのであらう。古くフックス氏が、旅順の大庫書籍整理処すなはち羅氏のもとに、金史・元史の満文訳である Aisin-i kooli 々 Dai Yuvan-i kooli と称する抄本が存すると極く簡単に注記してゐるのであるが、その元史が本書に外ならないと思ふ。

本書は線装本二冊に新たに仕立て直されてゐて、全て八十九葉から成り、全冊満文だけで、第一葉には「dai yuvan i kooli ningguci sidzu」即ち「大元の事例第六世祖」とタイトルが記されてゐる。第二冊の末尾には羅振玉の跋文がその子福頤の筆蹟で附せられてをり、それによると「此残卷拗通満洲文者言、起於至正十六年訖廿四年」とあるが、全くの誤りである。即ちよく調べてみると、第一冊は *ds yuvan i juwan ningguci aniya* 即ち至元十六年から始まつて同一

十四年の途中で終り、第二冊はそれに続いて至元三十一年で終るから、世祖の至元年間の後半の部分に当るのであつて、順帝の至正年間では断じてない。満文元史の刊本は、巻数を分げずに十四冊から成るが、その第六冊が丁度世祖の至元十六年から同三十一年までであるから、正しくロンドン大学の稿本と一致する。ところでこの稿本は全くの草稿であつて、到る処に抹消、塗改、挿入があるばかりでなく、あちこち大きな枠で章句を囲んでゐる。刊本と比べてみると、刊本はすべて訂正したやうになつてをり、大きく囲んだ部分は皆省かれてゐる。ただその上部に *ereheha* 即ち「これを書け」の書入れが二三あるが、いはゆるイキの意味らしく、その部分は囲みの中の文章が刊本に見える。その他、刊本の文字と若干の差異はあつても、大きな違いはない。ともかく刊本満文元史の定稿の出来る過程を知ることが出来、まことに興味深いものがあるといはねばならない。

一体、元史を満文に翻訳した経緯については清の実録中に記事があるが、先づ天聰九年五月に初めて太宗は文館の諸臣を集めて、遼宋金元の四史の中から、国家の政治や軍事等に参考になる箇所を翻訳を命じたのである。かくて翌崇徳元年五月から仕事が始められ、満三年を経て同四年六月に遼金元三史の翻訳が一応完成した。その後、順治元年三月に至り清書して順治帝に献ぜられ、同三年十二月に満文遼金元三史の

刊本が諸王以下甲喇章京以上に下賜されたのである⁽²¹⁾。以上のやうな経緯から考へると、満文元史の草稿は、早ければ崇徳四年六月には出来てをり、おそらく順治元年三月以前ののものであつて、入関前の遺物であることは疑ない。事実、用紙は古色のある高麗紙であり、書体は有圈点文字とはいへ極めて古いものである。むろん内容は元史の翻訳に過ぎないけれども、初期の満洲文字や満洲語、或は翻訳の実情などを考へる上に非常に貴重な資料といへよう。因みに満文遼金元三史について、聯合目錄頁〇には「按上列三書、乃係三史中之本紀、余曾与漢文三史略為対閱、見其内容、大体相同」とある。しかしよく検討してみると必ずしもさうではなく、満文草稿の部分についていへば、本紀から抜萃するともくに列伝からも適宜記事をとつて編年体に並べてゐるやうである。この満文元史稿本については、もとよりサイモン氏が研究されてゐるので、いまは一応の紹介に止め、詳細は同氏の研究成果に期待したい。

なほ序でにロンドン大学の蔵書中に、満文本ではないが、大紅綾本の「大清高宗純皇帝実録」の漢文一帙六冊と蒙文二帙七冊、並びに「大清穆宗毅皇帝聖訓」の漢文一帙五冊があることを附記しておく。

九

ケンブリッジ大学図書館 (University Library Cambridge) 所蔵のウェード・コレクションに多数の満洲本のありことは、古くジャイルス (H. A. Giles) の作成した目録 *A Catalogue of the Wade Collection of Chinese and Manchu Books in the Library of the University of Cambridge, 1898* にもみえてめて周知のところである。ただ現在ではこの目録に記された番号は改められてをり、満洲本については戦後フックス氏の手に成る目録稿本があるがなほ未刊である。ケンブリッジの満文刊本で比較的珍しいと思はれるものとして、「異域録」*Iakcha jecen de takuraha babe ejehi bithe* や前にも挙げた「清文洪武要訓」などがあるが、「網鑑会纂」*hafu buleku bithe* が全八十冊完全に揃つてゐるのは特に珍重すべきかと思ふ。むろん聯合目録^{三六}によれば北平図書館にも故宮にも存在するし、ウラシム^{三六}の国立図書館にもあり、メルチンデルフの目録にも見えるが、私はケンブリッジ以外ではコペンハーゲンの王立図書館で端本四冊 (第六九七二) を見たに過ぎない。満文抄本としては、やはり聯合目録^{三七}に著録されてゐるが、各章ごとくに半葉極彩色の挿絵の入つた精抄本「養正図解」*to be hūwasābure nirugan, suhe gisun i bithe* が最も興味をもたせるものである。

なほウェード・コレクションでも満洲本でもないが、大紅

綾本の「大清太祖高皇帝実録」の漢文二帙七冊と蒙文一帙三冊、並びに「大清太祖高皇帝聖訓」の漢文一帙二冊がケンブリッジにも存在することを注意しておきたい。

ところでケンブリッジと並ぶオクスフォード大学のボドレイ図書館 (Bodleian Library) にも満洲本が三十点ばかり蔵せられてゐる。しかし遺憾ながら特に注目すべきものを見出さなかつた。

さてイギリスには以上の図書館の外に、満洲本を若干蔵してゐるところが幾つかある。マンチェスターの目技通りにある有名なジョン・ライランズ図書館 (John Rylands Library) には、クロフォード卿 (Lord Crawford) のリンゼイ文庫の漢籍が入つてをり、その中に満洲本が十五六点含まれてゐる。そのことは古く刊行された同文庫の目録 *Bibliotheca Indesiana, Catalogue of Chinese Books and Manuscripts, Privately Printed 1895* によつても窺へるのであるが、点数は大して多くないとはいへ、比較的珍しいものがある。数点あるのは注意を要する。例へば順治刊本の「金史」*aisin gurun i suduri* や「元史」*dai yuwan gurun i suduri* とか、再版本ながら「清書指南」の附録「大清全書 *daiqing gurun i yooni bithe*」などがある。目録^{三〇}四〇頁によれば、「滿漢訓旨十則」や「康熙十年二月丁酉夜望月食圖」なども載つてゐるが、生憎く見付からなかつた。なほ抄本では、清の

張大復の伝奇「酔菩提」*dzui pu ti bithe*」の満文訳がある。全十巻二十冊から成るなかなかきれいな抄本で、全冊満文で漢字は一切記されてゐない。酔菩提に満文訳のあることはバンザロンの目録によつて知られてはゐるが、貴重な存在といふよう。

ロンドンの旧インド省図書館にも若干の満洲本があることは、古く出版された同図書館の目録 *J. Summers: Descriptive Catalogue of the Chinese, Japanese and Manchurian Books in the Library of the India Office, London 1872* によつて知られるところである。満洲本はほんの数点に過ぎないが、「*abkai ejen i tachiyari i hesen i bithe*」が珍しい。全冊満文だけの刊本で、上下二冊に分れてゐる。書名は「天主の教綱」の意味で、キリスト教の教義に関する書物であるが、未だその原典を明かにしてゐない。後述の如く、バリにはキリスト教関係の書物が多数あるけれども、この書物を見出すことが出来なかつた。

またロンドンの王立アジア学会にも若干の満洲本のあることは、同学会図書館の目録 *Catalogue of Chinese Printed Books in the Library of the Royal Asiatic Society, London 1889* によつてわかるが、目録に見える限りでは特に問題にすべきものはない。因みにこの満洲本は漢籍とともに、一九六三年リーズ大学 (Leeds University) にシナ学

講座が新設されるに際して同大学図書館に移管され、私が訪ねた時にはなほ未整理のまま積んであつたので、実地に調べられなかつた。

その他、ロンドンの国立文書館 (Public Record Office) にも満文文書が若干ある。その一つはアームスト (Amherst) の遣使の際に、嘉慶帝がイギリス国王に与へた嘉慶二十一年七月二十日附の勅諭の原本で、巨大な黄色の文書に、右から漢文・左から満文、中央にラテン文と三体で書かれてゐる。それから満文の書簡が二通ある。どちらも封筒に入つてをり、書簡の本文は全部満文で漢字がなく、封筒には満文のほかに表だけに漢字が入つてゐる。その一つは漢字で「山海関行欽差大臣親王僧大營 馬上飛遞」と書かれてゐるが、満文をみると、乾清門侍衛署山海関副都統から欽差大臣親王僧に送つた咸豊十年八月二十一日附の書簡である。親王僧が有名な科爾沁親王僧格林沁であるのはいふまでもなからう。もう一通のは、漢字では「正白旗滿洲都統」としか書かれてゐないが、吉林將軍より正白旗滿洲都統に送つた咸豊十年七月二十五日附の書簡である。なほ大英博物館にも満文の書簡が一通保存されてゐる。これは封筒がないが、黒竜江將軍より兵部に送つた咸豊十年八月七日附のものである。これら三通の満文書簡の存在は大英博物館のグリンステッド (E. D. Grinstead) 氏の教示によるところである。

十

ヨーロッパにおける満洲本の第一の宝庫は、何といつてもパリの国民図書館(Bibliothèque Nationale)であらう。先年池上氏はここで刊本抄本あはせて三十三点を調べ、全体の五分の一くらゐといはれてゐるが、正にその通りで、重複本を入れれば二百点を越えるかと思ふ。これらの満洲本については、ドイツ人のバルフ(W. Baruch)の作成したかなり詳しい解題をつけた目録の稿本が同図書館に備付けられてゐる。但しその目録に載つてゐるのは一六〇番までであつて、サイモン氏が目下その増補訂正を試みられてゐるさうである。ともあれその目録の出来るだけ速く公刊されることを願つてやまなう。

ついでには夙に名高う「無圈点字書」*tongki fuka aku hergen i dangse* や池上氏の紹介された「四書要覽」*sy su oyongo tuwara bithe* など最も貴重な存在であるが、他に知られてはゐても比較的伝本の少いものが少くない。例へば順治刊本では「遼史」*dalijoo gurun i suduri*、「金史」*「元史」*の三部が揃つてゐる外、「清文明洪武要訓」*「三國志」* *lian gurun i bithe*、「詩經」*si ging ni bithe* ⁽³⁷⁾がある。康熙刊本と思はれるものとしては、「滿漢同文類集」*man han tung wen lei jy* 二卷二冊が特に珍しい。この書名は「印刷

された滿漢合璧の題簽の文字であるが、見返には漢字だけで「同文物名類集」と異つた名前になつてゐる。内容は事類別の滿漢対照字彙で、前述の清書全集中の滿漢備考に似た体裁である。わが内閣文庫に一部ある以外に存在するのを知らない。⁽³⁸⁾その他、清書指南のついた「大清全書」の康熙癸亥(二十一年)初刻本や、「忠貞范文集」*tondo unengi fan gung ni wen jy bithe* ⁽⁴⁰⁾など康熙刊本の例である。雍正刊本には「異域録」があるし、乾隆刊本には前に触れた「滿漢合璧訓旨」の外、書名のない滿漢合璧の成句集二冊や乾隆五十四年刊の「蒙古律例」*monggo farun i bithe* ⁽⁴¹⁾など、ともに既にフックス氏が紹介されてはゐるが、珍しいものといへよう。

次に抄本も多数あり、そのなかには他処に見られないものも少くない。例へば「算法統宗」*hodoro arga i oyongso be araha uheri hesen i bithe* ⁽⁴²⁾や「論談諸病藥書」*痘疹藥書*と漢字で表題をつけた医薬書を始め、牟允中の「庸行篇」*yung hing biyan i bithe* や小説の「巧連珠」*ciyoo liyan ju i bithe* ⁽⁴³⁾など特に注目に価しよう。また「六韜・三略」*ninggun too, lian podogon* ⁽⁴⁴⁾も行書体の精抄本で珍しい。それから「水滸伝」*sui hu bithe* の端本巻一〜五の五卷五冊があるが、聯合目録三頁に著録されてゐるのは丁度その部分が欠けてゐるから相補ふものであらう。また「集

腋録 etten be isabuha ejetun]・「外国志 tulergi gurun be ejelhe ejetun]・「緬甸志 miyan diyen gurun de isinaha ejetun]・「金川志 gin cuwan de isinaha ejetun]・「長白山誌 golmin šanyan alin i ejetun]・「葉貴志 yün gui de saršha ejetun]・「尚善貝勒志 šangšan beile jasiba jasi-gan i bithe]・「阿爾勉哈志書 alcuka ba i ba na i ejetun] といふ殆ど満文の八部八冊から成る抄本がある。大体短篇の翻訳のやうで、嘉慶頃の筆写かと思はれるが、阿爾勉哈志書に「alcuka bai seremšeme tehe gūsai da i guwan fang] 即ち駐防阿爾楚喀協領関防と満文の方だけ判読出来る満漢両文の関防印が捺されてゐるから、元来同地にあつたものであらう。なほ檔冊として乾隆四十二年の「大行皇太后大事檔冊]、道光三十年の「孝和睿皇后大事檔]、同治八年の「内府札垣録書 dorgi dorolon i kungee yamun, sarkiyangga bithe] など内廷関係のものその他がある。

ちへパリの国民図書館の満洲本で、他処に比べて特によくまとまつてゐるのはキリスト教関係の書物である。先年ミッシュ(J. Mish)氏によつてヴァチカン図書館所蔵の「天主聖教約言] abkai ejen i enduringge tačhiyan i oyongo gisan] が紹介されたが、それと同版のものと及び異版のものがある。前者が全十一葉、後半葉七行であるのに対し、後者は全六葉、後半葉九行で、文字が細かく、刊刻の年代がやや

おくれぬやうに思はれる。その他「天主正教約數 abkai ejen i tob tačhiyan i temgetu i šošohon]・「天主葉義 abkai ejen i unenggi jurgan]・「性理真詮 sing iii jen cayan bithei hešen]・「關安記] geren holo be mlarambure bithe]・「天物真源] tumen jaka i unenggi sarkiyar]・「同善說] sain be uhelere leolen] などの刊本を始め、「滌罪正規] weile be geterembure jingkini kooli]・「天神会課] abkai enduri hūi i kicen i yaru-gan]・「盛世聖義] šeng ši cu nao]・「領聖体要理] enduringge beyei oyongo gıyan] などの抄本が揃つてゐる。「同善說] 以外の刊本は既出の書目等にみえはするが、これだけよく揃つてゐるのは蓋し壯觀と言ふべきであらう。

なほ最近池上氏が紹介された康熙五十五年の満漢ラテンの三文体で書かれた朱刷りの文書は、パリの国民図書館にも四部ある。その内の一部には、丁度中央で並んでゐる漢文と満文の日附の上に、満漢両体の長方形の関防印が一つ捺されてゐる。大英博物館所蔵の一部にも同じ印が捺されてゐるが「guwandung ni babe baicara tuwara coohai baita be kadalara guwan fang] 巡撫廣東等処提督軍務 関防] と判読できる。

とところでパリでは国民図書館の外に、ソルボンヌのシナ学研究所 (Institut des Hautes Etudes Chinoise de Paris)

の図書館にも満洲本が約六十点ある。その中には「八旗通志初集」の完本や、前述の国民図書館蔵本に比べると大部保存状態がよくないが順治刊本の「三國志」など比較的珍しいものがある。さうしたなかでも「清涼山新志」 cing Hiyang san alin i ice iy bithé) は特に珍重してよいかと思ふ。十卷十冊から成る殿版の極めて美しい書物で、メルレンドルフやウランバートルの目録にみえ、⁽⁵⁰⁾ 聯合目録頁⁽⁵¹⁾ にも著録されてゐるが、ここ以外で見つたことがない。その他、光緒二十八年から宣統二年までの時憲書が八部ある。

なほパリの東洋語学校 (Ecole Nationale des Langues Orientaux) にも十数点満洲本があるが、先年韓国で景印本の出た「韓清文鑑」の外には、特に注目すべきものはないやうである。

十一

ドイツにおける満洲本については、先に池上氏がよく調査されてをり、またかねてフックス氏がユニオン・カタログを作成されてゐて、遠からず刊行されるさうであるから、いづれ全貌が明かになると思ふので、私の気付いた点を簡単に記しておきたい。

西ドイツで満洲本が最も多く蔵せられてゐるのはマールブルグの国立図書館 (Staatsbibliothek der Stiftung Preu-

sischer Kulturbesitz) で、メルレンドルフ旧蔵本、ヘーニッシュ (E. Haensch) 氏の旧蔵本及びその他から成つてゐる。その他のものも元来ベルリンにあつたのであるが、その中で雍正の「大清会典」(daicing gurun i uheri kooli bithé) 全二百五十巻の殿版の完本は特に貴重といはねばならない。むろん聯合目録頁⁽⁵²⁾ や国立奉天図書館殿版書目⁽⁵³⁾ 満文に著録されてはゐるが、乾隆の大清会典が欧米のあちこちにあるのに對し、この雍正のは他に見当らなかつた。その他「八旗通志初集」もあり、「内務府檔案」といふ滿漢兩文混る四十冊もの檔冊があるが、内容的にはさして面白いものではない。

ヘーニッシュ旧蔵本には、殿版の「親征平定朔漠方略」の完本を始め「平定淮噶爾方略」 jun gar i ba be necihiyeme toktobuha bodogon i bithé) や「平定河金川方略 dzanla cucin i ba be necihiyeme toktobuha bodogon i bithé) の不完全本⁽⁵⁴⁾、「日講春秋解義」 inengcidari giyangnaha cūn cio i jurgan be sube bithé) の内府抄本など大部なものが目につくが、全滿文の「靖逆將軍奏議」が史料的に興味がある。靖逆將軍とは、康熙五十六年から巴里坤に駐してエルトを討つた富寧安 (Funingge) のことで、本書には同年から雍正二年までの間の、主として彼の上奏文が年月順に集められてゐる。本書の紹介は、先年刊行されたクラフト (E. Kraft) 氏の Zum Dsungarenkrieg im 18. Jahrhundert Beri-

chte des Generals Funingga, Leipzig 1953 に委しい。その他、「紅樓夢問答・紅樓夢論・虎口余生記」始め詩曲など文学関係の文字を集めた満漢合璧の抄本の小冊子二十冊が目についた。

東ベルリンのドイツ国立図書館 (Deutsche Staatsbibliothek) では抄本しか見なかつたが、内府抄本の光緒の「大清会典事例」が約七十冊もあるのは偉観であつた。巻一五二から巻八九四までの間がとびとびに残存してゐる。ただ戦災のためであらうか、著しく損傷してゐて、綴糸が切れ、不完全な冊子がかなり多いのはまことに遺憾である。本書の一部は前述の如くワシントンの国会図書館に十数冊あり、またロンドン大学にも巻二五五の戸部の部が唯一冊あるが、東ベルリンは格段に多い。その他、「北宋志伝通俗演義 *amargisung gurun i bibe*」が史伝小説の翻訳として珍しい。本書は全部満文で、ただ帙の題簽にだけ「清字北宋」と漢字で書かれてゐる。元来原本は南宋史伝通俗演義と対をなすのであるから、満文訳にも南宋志伝があつたのかも知れない。

次にデンマークのコペンハーゲンの王立図書館 (Det Kongelige Bibliotek) に満洲本が約七十点あることは既に池上氏が述べられてゐる。これまで二三引合ひに挙げたものの外、「水滸伝」の抄本の端本 (巻一八―二二) などもあるが、満文の説明のついた人体解剖図の精抄本はやはり断然他を感

厭してゐる。その立派な複製本がフランス文の解説と翻訳をつけて既に一九二八年に刊行されてゐることは、いまさら言ふまでもなからう。

十一

オランダのライデン大学の漢学研究院 (Sinologisch Instituut, Leiden) は、ヨーロッパにおけるシナ学研究の一方の雄として夙に名高いが、ここにも満洲本が四十点近くある。その中で最も重要なものは「満漢千字文 *man han c'yan dz wen*」であらう。この書名は、古く一八八三年に刊行された同大学図書館漢籍目録にみえてゐるのであるが、実見するに及び沈啓亮の作であることが判明した。実はこの書物は、大英博物館に一部あり、池上氏が特に写真を載せて紹介されてゐるほど珍しいのである。しかし封面の文字が少しく異り、大英博物館本に「福賢堂」とあるところが「省九曜坊翰經堂藏板」と改められ、「京都奎壁齋梓行」の奎壁が奎壁となつてゐる。また最後の頁の末尾に大英博物館本に「広城同文堂梓」とあるところが「羊城翰經堂梓」と変つてゐる。広城といひ羊城といひ広州で出版されたわけで、そのせいか大英博物館本の満洲文字は、池上氏の写真に見られるやうに非常に崩れた特徴のある書体であるが、ライデン本も同様で、一寸見たところでは封面と末葉以外は同版としか思へない。し

かし仔細に比べてみると、極めて忠実な覆刻本のやうで、大英博物館本の方が原板でないかと考へられるふしもあるが、さらによく検討してみたい。その他、「白鹿書院藏板」の朱印の捺してある「十二字頭 *juwan juwe uju*」がある。これが元来「正字通」に附して刊行されたものであることは説くまでもなからう。それから前述のやうに「清書全集」の第三冊「滿漢事類集要下」の刊本がある外、第一冊の「十二字頭」と第二・三冊の「滿漢事類集要上下」の抄本三冊も存在する。

最後にローマのヴァチカン図書館 (*Bibliotheca Apostolica Vaticana*) についていへば、滿洲本は僅か十点そこそこに過ぎないが、半数以上は非常に珍しい刊本である。即ちその一つは「箋註十二字頭 *giyan ju si ei dz teo*」といふ全十一葉の小冊子で、これまで書目などに見えないかの沈啓亮の著書である。封面には、この書名を中央に滿漢合璧で大書し、その右に「婁東沈啓亮較正 *luo dung sen ki liyang kiyoo jeng*」左に「增補滿洲雜話 *deung pu man joo da hūwa* 京都復魁齋梓行 *ging du wen then jy dz sing*」とすべて滿漢合璧で記してゐる。そして本文の末尾には「康熙歲次辛巳年孟春月吉旦」と漢字だけで日附を入れ、その次に「*leo dung sen hung joo araha*: 婁東沈弘照書」とある。康熙辛巳は三十年であるから、前述の彼の著作「御製百

家姓」より前に作られたわけである。内容は十二字頭について、各字頭ごとにその音を説明し、一々の字に漢字をあてたものである。そして滿洲雜話とは、彼の別の著作の「清書指南」巻二に収められてゐる同名のものと同く異り、各頁の上部のいはゆるタナに記した滿洲語彙で、漢語の下にその滿洲語を漢字音で表記してゐる。その漢字の表記の仕方は古風であり、また当時の発音の實際などを考へるに参考とならう。なほフックス氏が紹介されてゐる「滿漢十二字頭」なる書物は百七十年も後の咸豊辛酉（一八六〇）の刊本であるが、似たやうな体裁の滿洲雜話がついてゐる。実際に見たわけではないので委しくはわからないけれども、沈啓亮のと何か関係があるかも知れない。

次にヴァチカン図書館にも「滿漢千字文 *nan han ciyan dz wen*」がある。書名は前述の大英博物館やライデンにある沈啓亮のと同じであるが、全くの異本である。封面にはこの書名の左に「京都永魁齋梓行 *ging secen yung kui foloti selgyohé*」とあるだけで、序跋がなく、作者も刊行年もわからない。本文は全て十六葉で、每半葉八行、上下二段に分け、下段に漢字、上段にその漢字音を滿洲字で示してゐる。池上氏は沈啓亮の「滿漢千字文」とわが内閣文庫所蔵の抄本「清書千字文」について、滿洲字による漢字音の写し方を比べられたが、ヴァチカンのはむしろ沈啓亮のにちかい。

そしてその満洲字の書体は沈啓亮のと違つてずつと端正である。本書も前述の「箋註十二字頭」と大体同じ大きさの小冊子で、その体裁や書体からみて康熙中葉頃の刊本と考へてよからう。

また「滿漢百家姓 *man han be jiya sing*」もヴァチカン図書館にある珍しい書物である。封面には、滿漢合璧でこの書名を大書した左側に、ただ漢字で「京都二酉堂梓行」と記してゐる。そして本文の首行には、漢字だけで「滿漢合集百家姓」とある。本書は同じ百家姓とはいへ、クリーヴス氏所蔵の沈啓亮著作の「御製百家姓」とは全く別の内容で、あの趙錢孫李で始まる通行の百家姓である。全て十葉で、後半葉六行、上半部に満洲字で漢字音を示し、下半部にその漢字を挙げてゐる。漢字音の写し方が沈啓亮の「御製百家姓」と似てゐるのを見ると、両者に関係があるのかも知れない。本書にも著者や刊行年の記載がないが、やはり「箋註十二字頭」や「滿漢千字文」と似た体裁からみて康熙中葉頃の刊本と思はれる。

ヴァチカン図書館にはさらにもう一部似たやうな体裁の満洲本がある。即ち封面に、右に「清字解学士詩 *qing dz siye hiyo si si;*」左に「滿漢同文雜字 *man han tung wen dz dz*」と滿漢合璧で大書し、中央に漢字だけで「京都聚興齋梓行」と記した書物である。但し「清字解学士詩」とは、明初

の解縉の詩かと思ふが、どうしたことかその本文は全然無い。「滿漢同文雜字」の方は、滿漢対照語彙で、その本文の首行には「出相滿漢同文雜字要覽 *cu siyang man han tung wen dz dz joo lan*」とあり、全て十九葉、後半葉五行に分け、毎行上段に漢語とその発音を満洲字で示し、その下に図を画き、下段にはその満洲語の音を漢字と満洲字で表してゐる。即ち図を除けば「清書全集」の「滿漢事類集要」と同じ体裁である。図の入つてゐる滿漢語彙の書物はまことに珍しいが、第七、九丁の三葉は数詞や色名などのためか図がなく、上下各段に別々の単語を入れ、漢語には満洲字で発音を記してゐないから、この部分だけは「滿漢同文類集」の体裁に似てゐる。この「滿漢同文雜字」はヴァチカン以外に何処にあるか知らないが、その零葉がライデンの漢字研究院に蔵せられてゐることを附け加へておきたい。

なほキリスト教関係の書物としては、ミッシュユ氏の紹介された「天主聖教約言」の同版のものを二部見たに過ぎない。その他、康熙刊本の「清書全集」中の一冊や「滿漢同文類全書」があり、ヴァチカンの満洲本は少数ながら甚だユニークな存在といはねばならない。

十三

以上、欧米の各図書館において私が調べたところの満洲本

の概略を述べた。大体どの図書館にも他に見られぬ珍しいものが幾つかあるが、アメリカとヨーロッパとはその蒐集にかなり明瞭な傾向の違いのあることが認められる。アメリカの蒐集はヨーロッパに比べてはるかに新しく、殆どは二十世紀に入つて以後であらう。この新しい比較的短い期間に購入されたものであるから、クリーヴス氏のやうな篤志家の蒐集以外は、どの図書館も多少珍しいものがあるにしても似たやうな内容で、変化に乏しい。ただその時期が清末から民国初年に当つてゐたので、清室の滅亡や貴族の没落によつて外間に流出した内府抄本や殿版などの類が、アメリカの図書館には割合多く蔵せられ、それらの中に貴重なものがある。それに比べてヨーロッパの方はさすがに年代が古い。古くは十七世紀から始まり十八九世紀の間に、永年にわたつて蓄積されたのであつて、種類が豊富で、比較的古い書物が多く残つてゐるのである。

一体、満洲本の大部分は確かに漢文の書物の翻訳である。「異域録」や「百二老人語録」など極く僅かのもを除いては満文がオリジナルであるものはないといつてよい。さういふ意味では、満洲本はその内容に大して価値があるといへないが、しかし多くの漢籍が満洲語に翻訳されたことは儼然たる事実で、この事實は清代の満洲人の歴史を考へる上に重要な問題であると思ふ。また満洲本が満洲語の変遷などを知る

にも大切な資料であることはいふまでもない。このやうに満洲本を利用するには、先づどんな満洲本があるかを知るのが第一の仕事でなければならぬ。私は欧米の各図書館を廻つて、これまで書目などに見えない満洲本の刊本や抄本に接し得たが、今後さらに個々の書物について検討を加へるとともに、満洲本についての全体的な意義を考へてみたいと思つてゐる。それにつけ、先年外蒙のウランバートルでの地にある満洲本の目録が出版され、また昨年東洋文庫の満蒙本目録が刊行されたのはともに斯界のため慶賀に勝へないが、中国やソ聯にはなほ多くの満洲語文獻があることと思ふ。全世界の満洲本のユニオン・カタログを作成する必要を痛感するものである。

(明治大学文学部教授)

注

- (1) 山本謙吾「在米満洲語関係書目資料」(言語研究二二・三三号、一九五三)、池上二良「ヨーロッパにある満洲語文獻について」(東洋学報四五ノ三三、一九六二)、同補遺(東洋学報四七ノ三三、一九六四)。以下本文中に山本氏、池上氏といふのはすべてこれらの記述である。

- (2) T. H. Tsien, G. R. Nunn: *Far Eastern Resources in American Libraries, Library Quarterly* Vol. 29, No. 1, 1959 この翻訳が「図書館界」一一ノ三、一九五九と「大陸雜誌」二〇ノ一・二、一九六〇に

載してゐる。

(3) 満洲本の書名は、原本に漢字がある場合はそのまま記し、ない場合は「」に入れてゐる。なほ一度目からは煩瑣を避けて満洲語名を省略する。

(4) W. Fuchs: Beiträge zur Mandjurischen Bibliographie und Literatur, Tokyo 1936, pp. 11, 19.

(以下 Beitrage と略称する)

(5) この漢文記は、康熙九年の七政時憲書の漢文本(台湾の国立中央図書館所蔵)によつた。

(6) 台湾の国立中央図書館所蔵の光緒三十四年の七政時憲書の題簽に daicing gurun i badarangga doru i gusin duici aniya nadan dasan i hetu undu yabure dulefun i erin forgon i ton i bithé とあり、康熙

本のことと異なる。

(7) W. Fuchs: Neue Beiträge zur Mandjurischen Bibliographie und Literatur (Monumenta Serica VII, 1942, pp. 1~4) (以下 Neue Beiträge と略称する)

(8) N. Poppe, L. Hurvitz, H. Okada: Catalogue of the Manchu-Mongol Section of the Toyo Bunko, 1964, p. 199, (以下 Catalogue Toyo Bunko と略称する) 但し「清書全集」の一部のみについては注意を要する。

(9) Verzeichniss der Chinesischen und Mandjurischen Bücher und Handschriften in der Bibliothek der Kaiserlichen Academie der Wissenschaften, verfasst auf Befehl Sr. Excellenz des Herrn Grafen Alexis von Rasumowski, 1810 im August. 此の國民図書館とあるのは稿本として池上氏が既に紹介されてゐるが、その第八部 Philologische Schriften の部の No. 14 に清書全集を挙げてゐる。

(10) A. Wylie: Translation of the Ts'ing Wan Ke Mung, Shanghai 1855 p. xli

(11) Catalogue of East Asiatic Books on Religion, History, Literature, and Art, Collected by Dr. Berthold Laufer in 1908-1910, for the Newberry Library, Chicago, Ill. 以下題名の手写の稿本が、マンテンの農務省によつて写真複製が作られてゐる。なほラウナー・コンタシメントによつては石田幹之助「欧米に於ける漢籍の蒐集」(「欧米に於ける支那研究」所収、一六八—一九頁)参照。

(12) Far Eastern Quarterly Vol. XV, No. 3, 1956 の学界消息欄に銭存訓氏の筆に成るシカゴ大学極東図書館の記事が載つてゐるが、それは六十二点とあり、ラウ

- ンナー由來の Descriptive Account p. 1 びな約六十
 年を記しつゝある。
- (31) W. Fuchs: Beiträge pp. 11~12, Catalogue Toyo
 Bunko pp. 211-212
- (41) R. C. Rudolph: Emu tanggü orin sakda-i-gsun
 sarkiyän, an unedited Manchu Manuscript
 (JAOS Vol. 60, 1940)
- (15) W. Fuchs: Beiträge p. 30
- (91) *ibid.*, p. 34
- (17) P. G. von Möllendorff: Essay on Manchu Liter-
 ature (JNCBRAS Vol. XXIV, No. 1, 1890, p. 24)
- (21) W. Fuchs: Neue Beiträge p. 12
- (91) 国会図書館とは巻一〜一〇〇十巻五冊がある。尤も
 帙には「実録館滿蒙合璧朝賀録」と記されてゐるが、実
 は滿文礼部則例である。プリンスマンのは一度その部分
 が欠けてゐるから両者は同一の抄本である。
- (26) W. Fuchs: Beiträge p. 35 と No. 50 として考
 へられてゐるのと同版である。
- (21) フックス氏はただ「si siyang gi bithe」と記して
 るられるが、大英博物館の一本は各冊の表紙で、他の一
 本は帙に貼付されてゐる印刷した題簽に「Tuvanci-
 yame dasaha」即ち改訂の字を冠されてゐる。この文
- 字を冠したのは、シヤンキアンの目錄 Доржи Ванзаров:
 Каталог Книгам и Рукописям на Маньчжурском Языке,
 Находящимся в Азиатском Музее Императорской Ака-
 демии Наук (Собрание Соинений, Москва 1955, p. 123)
 によつてである。なほ大英博物館本は両本の巻頭の
 本一葉が同じである。
- (22) J. Klaproth: Chrestomathe Mandchou ou
 Recueil de Textes Mandchou, 1828 p. 221, A.
 Wylie: *op. cit.*, p. XXXIX
- (23) W. Fuchs: Neue Beiträge pp. 7-8, 天理図書館
 「燕文書籍集」六頁
- (24) J. Klaproth: *op. cit.*, pp. 36, 221
- (25) Д. Ванзаров: *op. cit.*, p. 115
- (26) W. Fuchs: Beiträge pp. 16~17
- (27) P. G. von Möllendorff: *op. cit.*, p. 21
- (28) W. Fuchs: Beiträge p. 30
- (29) *ibid.*, pp. 36, 129
- (30) *ibid.*, p. 124
- (31) 大実録卷二天聰九年正月己巳、世祖実録卷三順治元
 年三月甲寅、同卷二同三年十二月壬辰の各条、並びに
 刊本滿文遼史・元史の Hife の序參照。
- (32) L. Mistig: Ulaγan Barγatur qota-daki ulus-un

nom-un sang-un manju nom-un kömürgen-dür
bayir-a manju nom-un yarcaŋ, Ulan Bator 1959,
pp. 10~13

(33) P. G. von Möllendorff: op., cit. p. 31

(34) リンゼイ文庫に於ては石田前掲書一六一・一七六
頁に解説がある。

(35) J. Baranow: op. cit., p. 124, 七〇九頁には七冊と
あるから完全なといかわからぬ。

(36) このタイトルは表紙に印刷されてゐるものば、扉に
は Printed Books が Manuscripts となつてゐる。こ
かし刊本を含むのであつて、ロンドン同学会で備付の
この目録では、Manuscripts を Books とインクで訂
正してゐる。石田前掲書一五九一六〇、一七四一五頁參
照。

(37) 順治七年刊本で二十四冊完全に揃つてゐる。聯合目
録^{三二} W. Fuchs: Beiträge p. 86; Neues Material
zur Mandjurischen Literatur (Asia Major Vol.
VII, 1933, p. 477) 参照。

(38) 順治十一年十二月吉日附の御製序のついた二十卷一
十冊の全満文の刊本で、花紋黄綾で装幀された美本であ
る。聯合目録^{三三}でも著録されてゐる。

(39) W. Fuchs: Neue Beiträge p. 18 で内閣文庫の旧漢

書目録によつて書名が挙げられてゐる。内閣文庫のは四
冊に分けられてゐるが、元来はハリの如く上下二冊で
あつたのであらう。なほ内閣文庫本には印刷された題簽
はついてゐないが、邦人と思はれる手蹟で各冊の表紙に
「滿漢同文類集」と書かれてゐるから、もとはやはり題
簽がついてゐたに相違ない。

(40) P. G. von Möllendorff: op. cit., p. 19, J. Bar-
anow: op. cit., p. 116 参照。

(41) W. Fuchs: Neue Beiträge pp. 12~13 参照。

(42) W. Fuchs: Beiträge p. 39 参照。ハリののは十二卷
六冊完全に揃つてゐる。

(43) 全冊満文で、原裝十七冊を洋裝二冊に製本し、背文
字に TSOLIAN-FA-TONG-TSONG とローマ字を入れ
てゐる。これは算法統宗の音を表したものであらう。明
の程大位の算法統宗は十七卷であるから、その訳かと思
はれるが、原裝の第五・六・七・八・十二・十三の各冊
の封面に suwan fa dzuwan yao dzung g'ang bithe
と滿洲字で書かれてゐる。これは算法纂要総綱であらう
か。原典についてはなほよく検討したい。

(44) 「論談諸病藥書」は二冊で、第一冊には okto i
banin fu jen ju nang kamchabi とあるから、珍珠
囊藥性賦であらう。第二冊には harkasi fu 即ち熱病賦

とある。「痘疹案書」は第三・四冊の二冊で、ともに *ohoro baitai dasara hacin be hafumbure bite* とある。これらの原典をめぐっては、今後よく検討したい。なほ *J. Baharpos: op. cit., p. 122* でも本書に属するものが著録されてゐる。

- (45) 八巻八冊より成る全満文の抄本で、最初の二葉にだけ満文の右傍に漢字が書入れられてゐる。そして第二冊と第六冊の二冊だけに表紙の題簽に「満文書名」とも「巧連珠」と漢字が書かれてゐる。因みに巧連珠の書名は鄭振鐸「中国通俗文学史」下三九に鼓詞として載つてゐるが、孫楷第「中国通俗小説書目」六一九には日本の内閣文庫所蔵の坊刻本の「巧聯珠」四卷十五回を挙げてゐる。満文抄本にみえる連の字と巻数とが異なるが同じものである。尤もどういふわけか「内閣文庫漢籍分類目録」には本書が著録されてゐない。

- (46) *J. Mish: A Catholic Catechism in Manchu* (*Monumenta Serica* Vol. 17, 1958, pp. 361-372)
- (47) 漢名は、原本の題簽に「イモン氏のもの」が、サイモン氏の教示によるものもある。なほ徐宗沂「明清間耶穌會士訳著提要」が参考になる。

(48) 天主正教約翰は *J. Baharpos: op. cit., p. 121* で抄本が著録され、天主実義は *P. G. von Möllendorff:*

op. cit., p. 29, 性理真銓は *ibid., p. 20*, 及び *J. Baharpos: op. cit., p. 114*, 關公説は *ibid., p. 121*, 万物真源は *ibid., p. 121* 及び *A. Wylie: op. cit., p. XLV*, *P. G. von Möllendorff: op. cit., p. 28* でそれぞれ見えてゐる。

(49) 漢字の部分は不鮮明で、□内は不明。明清史料などに見える当時の巡撫の称号の例から補つた。

(50) *P. G. von Möllendorff: op. cit., p. 38, L. Missig: op. cit., p. 208*

(51) 平定両金川方略は巻首と巻一―七二の計六十冊である。因みに聯合目錄三八に著録されてゐる同書の北平圖書館所蔵刊本は、巻七三―一二六の六十冊しかないから、マールブルグ本の片割れであらうか。

(52) 本書が北宋志伝の訳であることはサイモン氏より教へられた。帰国後漢文本と対照してみると正にその通りである。

(53) *Anatomie Mandchoue, Facsimilé du Manuscrit No. II du Fonds Oriental de la Bibliothèque Royale de Copenhague, publié sous les Auspices de M. Abr. Gold-Hansen par M. Victor Madsen, Traduction du Texte Mandchou par M. Vilhelm Thomsen, Copenhague 1928*, 本書は石田幹之助「清の

康熙帝と解剖学―複製された稀覯書―(文化交流一号、一九五三)に詳しく紹介されてゐる。

(54) *Catalogue des Livres chinois qui se trouvent dans la Bibliothèque de l'Université de Leide, 1883 p. 12*

(55) 第二・三冊の封面は前述の如くであるが、ライデン本には封面はない。本文には滿漢事類集要とか滿漢備考とかいふ名になつてゐる。

(56) ヴァチカン図書館には、古くペリオの作つた漢籍目錄の稿本 *Inventaire Sommaire des Manuscrits et Imprimés chinois de la Bibliothèque Vaticane par Paul Pelliot (13 juin-6 juillet 1922)* が備付けられてゐて、滿洲本も含まれてゐる。但しこの目錄には漢字が全く使はれてゐない。

(57) この滿洲字はかなり崩れてゐて、復魁齋の音など誤りで、且つよくよめない。

(58) *W. Fuchs: Neue Beiträge pp. 15-16*

(59) この滿洲字もかなり崩れてゐる。

(60) 同右

(補注1) 最近、池上二良氏の教示により「清書全集」が慶応義塾大学に蔵されてゐることを知つた。五冊揃つた完本であるが、一部分クリーズス氏蔵本とは異版

のやうである。

(補注2) 大谷大学図書館所蔵の「巧聯珠」四卷十五回について滿文抄本と比べてみると、巻の分け方は異なるが、内容には変りがない。

附記

本稿は、一九六四年十月二十一日の東洋文庫秋期東洋学講座で発表した内容に手を加へたものである。なほ今回の私の調査に際しては、欧米各地の図書館の関係者その他多くの方から非常なお世話になつた。いま一々尊名を挙げることを省略させて頂くが、深甚の謝意を表したい。また故袁同礼博士や F. Cleaves, W. Simon, W. Fuchs の諸教授からは専門的に何かと教示に与り感謝に勝へない。私はロンドンに比較的長く滞在したせいもあつて、特に Simon 教授にはたびたびお目にかかつたが、教授は滿洲本の所在その他について実に懇切な助言を与へて下さつた。その厚意に対し滿腔の謝意を捧げるものである。

追記 本稿の校正中に M. П. Волкова: Описание Маньчжурских Рукописей Института народов Азии АН СССР, Москва 1965 を入手した。参照すべき点が多々あるが、今は間に合はぬので他日に譲りたい。